

「……見捨て られたか」

………大丈夫、わかっている。俺は腐っても勇者だ。魔王の手に堕ちるわけにはいかない。もしそんなことにでもなれば、俺にはもう帰る場所がなくなってしまう。

媚薬飲ませた勇者を魔王の
間に置き去りにしてみた



花 摘 あ こ

「あ、床、やだ」

ああ、ダメ、
気持ち良すぎ
てエ、も、
なんも、考
え、らんない♡♡♡

俺なんてことをツ♡ こんな娼婦でも言わないだらっ？

「何百年振りだろうか、
こんな昂ぶりは……」

「勇者よ！ お前が悪い！ よりにもよって発情状態で我の前に現れおって！」

ペロペロペロペロ……ジュルジュルジュル……ジュルツチュツチュツ
チュツ……ジュバジュバ、レロレロ………ジュル〜ツジュツジ
ュツジュツ……ああ、もう、どこまでが俺の口でどこからが魔王の
口かわからない……溶け合ってる……身体ぜんぶ、蕩ける……♡♡♡

いよいよ最終決戦だ。

長い冒険の末、俺たちは魔王城の前に立っている。

俺の剣術の練度は十分だと思うが、魔王相手ともなると勝てるのか未知数だ。しかも相棒の盗賊は敵の隙をついて俺の戦闘をサポートする役目しか担えない。

不安だ。命を散らす覚悟でここまで来たが……圧倒的な力を前にすると使命感も萎む。俺の重々しいため息を、親友でもあり唯一無二の仲間でもある盗賊は聞き逃さなかった。

「どうした？ 勇者様ともあろうお方が！」

「いや……やっぱり、少し怖いな……？」

「だーいじょうぶだって！ お前なら絶対に世界に平和を取り戻すさ！」

「その信頼は一体どこから来ているんだ……」

先日魔王直属の配下と対峙した際も命からがら逃げまどい、なんとかコイツの卑怯な戦法で勝ちおおせた。ギリギリだったのだ。やはりこんな状態で魔王に挑むなど……。

「仕方ねーなあ。俺のとおっておき、出しちゃいますか」

そうして出てきたのは手のひらに乗るほどの小瓶。ベリーを煮詰めたような液体がちゃぽちゃぽと波打ちながら輝いている。これはなんだと目で訴えると、奴は妙に機嫌良さそうに俺の手に押し付けてきた。

「飛躍的に戦闘力を上げるシロモノなんだとよ。1千万ゴールドした」

「お前、そんな金どこから……いや、まあいい」

手癖の悪いコイツのことだ、きっとまた店先から盗んだのだろう。いつもやめろと言っているのだが今日ばかりは感謝しておこうか。俺が自信なさそうなのを見抜いて用意しておいてくれたんだもんな。

「ン、美味しい」

「ささ、一気にぐいーっといっちゃって！ 効き目はすぐに表れるはずだ」

「お前はいいのか？」

「俺は頭脳派だしね。実際に肉体労働するのはお前の役目ってことで」

「へーへー、キリキリ働かせてもらいますよ」

口は悪いが憎めない。コイツとはいわゆる幼馴染で、パーティーを組む前からの腐れ縁だ。いまいち人を信用できない俺にここまで付き添ってくれた唯一の仲間。だから最後まで俺が守り抜くと決めている。

「前線にはいつも通り俺が立つからな」

「頼りにしてます勇者さま！」

糸目が笑ったとて感情が読めない。胡散臭い。

しっかりと顔をしかめつつ、絶大の信頼は隠して俺は前に進み出た。扉に手をあてるとなんと自動で開いた。長い廊下を歩き、階段を上った先に大きな扉……そこもひとりで開き、かくして魔王は中央に鎮座していた。

「待ちわびたぞ、勇者よ」

ブワッ。絶大な覇気に気圧されて足元がおぼつかなくなる。

———勝てない

そう、思ってしまった。自分を信じなければ終わりなのに。相對しただけで心が挫けるほどの圧気に、歯がガチガチと鳴り、涙が滲んでくる。

俺は多分ここで死ぬ。隣の相棒は気まずくて見れない。きっと俺と同じ顔で絶望しているに違いないと思うといくらか救われた。

「ううっ……」

その場にガクリと膝をついたのは自分の心が弱いからだと思った。違う。鼓動がやけにうるさい。腹の奥がぐるぐると渦巻くように暴れて、下半身が、勃起して……もしかしてあの薬の効果だろうか？

精力増強はいいことだがこうも効果が強いとまともに動けない。熱が異常なほどに上昇して息が荒くなってきた。そのまま力なくその場に倒れて、俺は相棒の助けの手を待つ。

「クソ、早く……」

隣の人影が走り出す。俺のほうにではなく———開け放たれたままの門扉の方へ、まっすぐと。

ガーンと頭を殴られたような衝撃に俺は今度こそ地に伏せた。逃げたのか。俺を置いて……仲間なのに、親友なのに……信じていたのにッ……………。

「……見捨てられたか」

魔王が手をかざすと巨大な門は閉まる。相棒の声は聞こえない。どうやら無事に逃げおおせたようだ。お前はいいよなチクショウ。俺はこれから死ぬんだ。せめて名誉の死を遂げた勇者として、永く城下に語り継いでくれよな……………。

相棒を憎む気持ちすら高熱によって消え失せた。頭がボーッとする。痛む下半身を抑えてのたうち回る。魔王が玉座から立ち上がり、ゆっくりとこちらへ歩み寄って来た。

「勇者よ、どうした？ まさか自害するのか」

「くるなッ……！」

最後の力を振り絞って顔を上げる。涙がだくだくと流れて顔は熱くてきつとこれ以上無いほどにみっともない。案の定、魔王は少し狼狽えて俺の顔を凝視している。

魔王を前にして戦う前に跪く勇者になんて、なりたくなかった……チクショウ、チクショウ……！

「様子が、おかしいな……？」

動揺を隠さない表情で、魔王は口を一文字に結んで手をかざした。俺の身体は無重力に包まれてふわりと浮かび上がる。そしてさらけ出された。涙に濡れた情けない顔も、恐怖で漏らした跡も、それから、服の下で勃起している膨らみさえも……。

「殺せ！！」

魔王はきっと呆れているのだろう。もう今すぐに死にたくなかった。そうだ、俺は勇気ある勇者のままで死にたい。変な薬を飲んだ挙句逃げ遅れて魔王の圧倒的な力の前にひれ伏すのが決定事項というなら、せめて詰られず、魔族の慈悲でもって即、息の根を止めて欲しかった。

しかし願えど魔王はしげしげと俺を眺めているだけで、攻撃を放ってこようとはしない。やがてもう片方の手で摘まむような動作をしたかと思うと、俺の服がはじけ飛んだ。すべて。

「なっ……！？」

「殺す前に遊んでやろうか」

「やめっ……来るな！！ 離せ！！ 殺してくれッ……！！」

何をされるかわからないまま空中で必死にもがいた。ダメだ、全然動けない。俺は全裸で宙に礫にされたまま、目の前まできた魔王を見た。

人間とはまったく違う、おぞましい肌の色……幾重にも重ねられた顔のシワが、俺たち人間の寿命を遥かに凌駕していることを表している。醜い……そう表現することは簡単だ。

しかし見上げるほどの体格は圧倒的な強さを誇示し、種族問わずすべての男がひれ伏したくなるほどのオーラを纏っている。俺の中に去来する畏怖が、彼の造形すべてを引き立たせて見えた。人間とは一線を画する存在……その最強生物に今自分が一心に視線を注がれているという事実悦びさえ覚えていた。

「ほう……」

べた。魔王の大きくゴツゴツとした手が俺の胸元を包む。そのまま両手で撫でまわしてくるいやらしい手つきから、俺の肌の感触を愉しんでいるのが伝わってきた。魔族もこういうことをするのか、なんてどうでもいいことに思考を割いて、今自分が置かれている状況から逃避しようとする、俺は愚かだ。

それにしても本当に巨大な手だ……人間の中でも特段小柄な俺の胸元を片手だけで覆い尽くして、身体中をいとも簡単に何往復もしてしまう……ああ、息があがる、クソッ……魔王の愛撫に感じる勇者がどこにいるんだ……！

「気持ちいいのか？ ン？ 声が漏れておるぞ」

「こ、ころして……殺してくれっ……ふうンッ……そんな触り方、いやだっ……」

「ひと思いに心臓を貫かれたほうがいいのか？」

懸命にコクコクと頷く。絵面は情けなかったが、どうやら魔王は感銘を受けたらしい。ため息をついて「なんと高潔な魂だ……」と口元を緩める。ツウッと指先で首の中心からへそまでをなぞられて上ずった声が出てしまう。失態だ。

「ますますお前を穢したくなかったぞ」

「ヒイッ、やめ……」

「体の芯まで……心の奥底まで……」

「やらあつ、そこ、しないでえっ」

魔王の手に竿を握られて扱かれている。なんて、魔王城に入る前の俺に言っても絶対に信じないだろう。そんなあり得ない事態が今俺の身に起きている。魔王は舌なめずりをして俺をの顔を凝視している。

発情状態の俺の身体はすぐに達してしまった。空中に浮かされたままに情けなく射精して、魔王の魔力に身を委ね、脱力する。ぶかぶかと浮いたまま精液を垂れ流す姿はさぞ滑稽だっただろう。

「ふあ……ああっ……」

「何百年振りだろうか、こんな昂ぶりは……」

差し伸べられた両手に吸い寄せられて、俺の身体は魔王の胸の中に収まった。抱きすくめられて唇を奪われる。羽交い絞めにされていたので抵抗できなくて、そもそももう抵抗する気力もなくて、ブチュブチュと唇全体を押し付けてくる汚らしい口づけを受け止め続けるしかなかった。

存外臭くはなくて安心した。魔王の息が鼻先にかかるが、少しの加齢臭がするだけで不快になるほどではない。魔族は人間ほど臭わないのかな。なんてことを考えていたので、俺は俺の荒い息を同じように魔王に吐きかけていたことにも無自覚だった。

魔王が俺の口元で深呼吸をする。そして後頭部を両手で抑え込むと、本格的に口内を貪られた。

舌が、長い……ヌチュヌチュっていろんなところに入って舐め取られていく……牙が当たって痛い、けど、傷つくほどではなくて、むしろ……気持ちいいかも、なんて……そんなこと、思ふべきではないのに……。

「ぶはあ……おお～……なんと芳醇な味わいだ……」

「ああ……ああっ……」

「永遠に蹂躪していたい……！」

足先がぶらんぶらんとした状態で、背中と後頭部だけを固定されてキスは続いた。いや、キスなんて生易しいものじゃない……まさしく蹂躪だ。魔王の舌が、ファーストキスもまだだった俺の口内をどんどん暴いていく。

喘ぎも唾液も何もかも吸い取られて、代わりにたっぷりとした魔王の舌を食まされる。気付いたら俺も舌を出してそれに応えていた。魔王は腰を振り、いつの間にか俺の下半身も片手で固定している。そのせいで硬いモノが尻の谷間に擦れているのに、俺は気付いてしまった。気付かないふりで、ひたすら魔王の口吸いに没頭した。

ベロベロベロベロ……ジュルジュルジュル……ジュルツチュツチュツ……ジュパジュパ、レロレロ……ジュル～ツジュツジュツジュツ……ああ、もう、どこまでが俺の口でどこからが魔王の口かわからない……溶け合ってる……身体ぜんぶ、蕩ける……♡♡♡

「イイぞ勇者……オオッ……もう準備万端だな……？」

「う……」

魔王の肉棒、硬い……擦り付ける動きが激しくなっていく……どうしてこんなことされて

気持ちがいいんだろう……お腹の中が、キュンキュン疼く……俺、一体どうしちゃったんだ……？

魔王の力強い両手が俺の尻たぶを掴んで全体重を支えている。あまりの体格差に自分がどれほどちっぽけで矮小な存在か突きつけられた気分だ。

きっとこのまま子ウサギのように魔王に食べられて……そして殺されるだけの命だ……それならもう何をされたって……ああ、お腹気持ちいい〜ッ……まだナニもされてないのに、ナニもされてないのにッ……♡

水音が響いてそれが自分の愛液だとはついぞ気付かなかった。魔王はついに俺を片手の手の平に座らせて自身の肉棒を俺の後孔にあてがう。ミニチュアの人形になった気分だ。ああ、それなのに肉感は生々しくて……容赦なく、俺のナカに突き刺さってくる……！

「うああああっ……！」

「おお、おお、自ら飲み込んでいくぞっ……」

ズプププププッ……絶対に挿入るわけない質量のそれを、魔王の言う通り俺の身体は自ら誘い入れていく。内壁がひとりで蠢いて、媚びるように魔王に吸い付いて……眼前でみるみるうちに蕩けていく魔王の表情が答え合わせだろう、羞恥で狂いそうだ。

それにしても魔王、こんな顔もするのか……俺のような小さな人間一人を抱いたところで、眉一つ動かさないイメージがあったが……欲情して口元をだらしなく緩める様は人間と変わらない。

すべて収めるとさすがにナカはパンパンになって、息をするにも苦しい。魔王は気遣うように緩やかにナカを抉ってまるで解すような動きをする。なぜだかそのことにひどく安心して、魔王の首筋に縋りついた。

「素晴らしい……この締め付け……ああ、この匂い……」

「ああ〜……あッ、うッ、ううンッ……ふにやっ、やら〜〜〜」

顔が近いのをいいことに魔王が頬ずりして嗅いでくる。俺の匂いがなんだというんだ。緊張して汗だくだし、失禁してしまったし、そんな俺の発する匂いが魅力的なもののはずがないのに。

魔王はさもありがたがるように大袈裟に息をして俺の首筋に鼻先を擦り付けてくる。みっともない。魔族の長たる最強生物がこんな、一人の人間に……ああ、そうか……俺のことなんて生物扱いしていないから、こんなみっともない姿をさらけ出すことができるのか……クソッ。

「解れてきたぞっ……愛い奴だ……」

「ふむうンッ」

魔王は小刻みに腰を揺らすのをやめて、唐突に俺の唇を奪った。両手で頭を覆って、何度も角度を変えて……甘やかすようにじつくりと口内を撫でる舌の動きに、また意識がボーッとしてくる。

俺、たぶんキス、好きだ……相手が魔王っていうのが、認めたくないけど……こんな褒めて

くれるみたいに頭も顎も撫でながら……ナカにドクドク脈打つ熱いの、嵌められて……そんな状況でキスされてるなんて……ああ、こんなのはじめてでっ……。

「ああ、ああ……っ」

「おお～～っ……」

つい舌を差し出して絡めてしまう。口の外でぬるぬると混ざり合う蛇は確かに互いに動いていて、はしたないと思っても止められなかった。魔王も興が乗ったように俺の身体中を撫でて盛り上げている。

俺、倒すべきはずの相手と、魔王と……ナニしているんだろ……だけど、今は薬で発情しているし、気持ちいいし、魔王、意外と優しいし……ああ腰動いてる♡ 気持ちいいッ♡
しがみついて、もっと激しく揺さぶって欲しいと仕草で訴える。どうやら伝わったらしく、魔王は俺を抱え直してズンズンと腰を入れてきた。ああスゴいスゴいっ……俺、セックスされちゃってる……魔王に、セックスされちゃってる～ッ……♡♡♡